

HIV 陽性者に対する精神・心理的支援のための身体科主治医と精神科専門職の 連携体制構築に資する研究(総括)

研究代表者：池田 学（大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室 教授）

研究分担者：白阪 琢磨（国立病院機構大阪医療センター 臨床研究センター長）

橋本 衛（近畿大学医学部 精神神経科学教室 主任教授）

仲倉 高広（京都ノートルダム女子大学現代人間学部 講師）

1. 研究目的

本研究では、HIV 陽性者の身体科主治医と精神科医療関係者相互の診療・相談体制の連携・構築を推進し、精神科医療の専門職（精神科医、臨床心理士/公認心理師、精神保健福祉士/社会福祉士、看護師/保健師など）がこの連携に積極的に関与できるようなマニュアルや研修教材を作成する。特にコロナ感染症蔓延下での主治医と精神科医療者相互の診療体制の連携・構築を促進するための精神科医療専門職の研修体制、主治医が精神科医療者への共同診療を依頼するための精神症状の見立てやタイミングを見極めるための研修教材の開発を目指す。

研究1(池田) ①今年度は、過去に実施した HIV 研修会をもとに精神科医向け、メディカルスタッフ向けの HIV /AIDS のパンフレットを作成する。②近畿圏内のエイズ治療拠点病院の感染症内科医を対象に精神科との連携状況について調査する。

研究2(白阪) HIV 陽性者のメンタルヘルスの現状と精神科受診・カウンセリング利用の阻害要因を明確化すること、受診・利用の促進方法を検討すること。

研究3(橋本) ART の進歩により HIV 患者の生命予後は延長し、今後 HIV 陽性高齢者の増加が予想される。そこで本研究では、HIV 陽性高齢者における HAND の実態を明らかにする。

研究4(仲倉) HIV 医療と精神科医療との連携を促進するため、研究Ⅰでは MSW 技術の明確化、研究Ⅱではカウンセリングの効果評価指標の抽出、研究Ⅲでは喪失体験に対するコミュニティレベルの介入方法について検討することを目的とする。

2. 研究方法

研究1(池田) ①2021 年度に実施した精神科医の HIV 研修会ならびに 2022 年に実施したメディカルスタッフを対象とした HIV 研修会の講演内容をもとにパンフレットを作成する。②近畿圏内のエイズ治療拠点病院の感染症内科医に WEB アンケートを実施する。

（倫理面への配慮）大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会の承認を得た。

研究2(白阪) 大阪医療センター外来通院中の陽性者 500 名を対象に、メンタルヘルスの問題、医療者への相談、精神科受診・カウンセリング利用などに関して調査を行った。昨年度の量的データの分析に加え、今年度は自由記述欄を分析した。

（倫理面への配慮）大阪医療センターの倫理委員会に相当する受託研究審査委員会の承認を得た（21096）。

研究3(橋本) 国立病院機構大阪医療センターに通院中の 60 歳以上の HIV 陽性患者を対象に神経心理検査を実施し、認知機能低下・精神症状を認める患者の割合、認知機能の障害プロフィールを明らかにする。

（倫理面への配慮）本研究は近畿大学医学部倫理委員会の承認を得た（R05-067）。

研究4(仲倉) 研究Ⅰ：ACC およびブロック拠点病院勤務の福祉職（以下、MSW と略す）を対象に、精神科連携についてミーティングを月に一度、オンラインにて開催し、精神科との連携に必要な MSW のスキルや、そのスキルの均てん化のための研修会方法の検討を行った。研究Ⅱ：中断事例の試行的カウンセリングの過程と心理検査データについて総合的な分析をディスカッションにて行った。研究Ⅲ：世界エイズデー・メモリアル・サービスを第 37 回日本エイズ学会学術集会にて実施した。

(倫理面への配慮) オンラインによる開催のため、文書と口頭で、守秘や録音などの禁止など配慮について確認の上、実施した。研究Ⅱに関しては京都大学、および京都橘大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 研究結果

研究1(池田) ①精神科医とメディカルスタッフ用のパンフレットを作成中であり、3月上旬完成予定である。ホームページで公開する。②27名から回答が得られ、精神科との連携に困難があるが9名(33.3%)であった。困難な理由は自施設に精神科があるが特別な理由がないと診療が受けられない3名、紹介して断られないか、あるいはHIV陰性者と同じように診療してもらえるか気になり紹介できないが2名、であった。自由記述では近医精神科や心療内科への紹介が困難、精神科受診が必要と考えられる状態でも患者が同意してくれない、患者の自己中断があった。

研究2(白阪) 希死念慮や飲酒の問題が多く認められた。量的データでの未受診・未相談の理由は「自力で解決する」「受診で解決しない」「HIV/性的指向に偏見があると思う」などであったが、自由記述欄でも同様の回答が認められた。

研究3(橋本) 19名の対象者(全例男性、平均年齢69.3歳)に対して、認知機能検査を実施した。そのうちの2名(10.5%)で認知症の存在が、5名(26.3%)で軽度認知障害の存在が疑われた。

研究4(仲倉) 研究Ⅰ：すべてのブロック拠点病院およびACCより同意が得られた(当ブロックに内に複数ある場合は1施設のみ)。2時間のオンライン会議を計8回行った。九州医療センターにて9月17日に研修会を実施、15名の参加者であった。各自が実施した運営上の事柄を集約中。2024年1~3月オンライン会議にて運営のためのスキルを整理する予定。研究Ⅱ：終結事例1事例、および中断事例1事例について、それぞれ6時間のディスカッションを重ね、質問紙法、文章完成法、投映描画法、面接での言動、および身体症状といったクライアントの多層的なメッセージ(表現)は時に相反するようなものも含まれていた。HIV陽性者はカウンセラーとの関係を言及するも、HIV陽性者自身の中の自己との関係について言及している可能性が考えられた。研究Ⅲ：本年度は、有志による検討会で調査方法や調査内容など研究計画を検討するにとどまった。

4. 考察

研究1(池田) ①精神科医やコメディカルを対象としたHIV研修会による啓発教育が、HIVへの不安や抵抗感の軽減や正しい知識の普及啓発につながるため、その内容に基づくパンフレットは啓蒙活動の一助になると考える。

②の結果からも、エイズ拠点病院内で精神科への紹介が概ね困難なく行われているものの、紹介しても自施設や近医精神科への受入れが困難なことも存在している。受入れできる精神科のリストがあるとより連携が進むことが示唆される。

研究2(白阪) 専門的援助がもたらす益の想像困難、偏見の恐れなどから自力での解決を試みており、益の明示および専門家への啓発の必要性が、質的データを通して裏付けられた。

研究3(橋本) 本研究ではHIV陽性高齢者の1/3以上において認知機能低下の存在が疑われた。HIV陽性高齢者では、健常高齢者よりも認知機能低下を来しやすい可能性がある。

研究4(仲倉) 研究Ⅰ：集約途中ではあるが、MSWの思考の過程を記述することができた。MSWの思考の過程をソーシャルワークの価値を基準に記述することで、MSWの機能やMSW独自の思考の過程を共有することが可能になると考えられる。研究Ⅱ：クライアントの表現を層的に理解することが重要であり、カウンセリングの効果評価のためには、層的に評価する指標が必要であろう。

5. 自己評価

1)達成度について

研究1(池田) 予定通り、順調に進行している。

研究2(白阪) 本調査は研究計画の通り実施されており、十分達成されていると考える。

研究3(橋本) 調査の開始が令和5年12月初旬にまでずれこみ、調査の進行が大幅に遅れている。そのため現在も調査を継続中であり、今回は調査途中の結果を報告した。

研究4(仲倉) 研究Ⅰは、研修会におけるMSWの思考過程を抽出途中ではあるが、概ね達成できている。研究Ⅱは、データ集積途中であり、達成には至っていない。しかし、中断事例など集積した事例の検討、および投映描画法などの検討に着手できた。研究Ⅲの研究計画段階であり、達成できていない。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

研究1(池田) 精神科受診が必要な HIV 陽性者がより安心して受診できる体制づくりに向けて、HIV に関する正しい知識の普及は双方の抵抗感を下げることにつながられると考える。

研究2(白阪) HIV 陽性者の精神科受診およびカウンセリング利用の阻害要因に関するこの規模の調査は、本邦では実施されておらず、学術的・社会的意義を有すると考えられる。

研究3(橋本) 本研究で得られた成果を、HIV 患者の診療に携わる専門医や認知症診療に携わる医師が活用可能な高齢 HIV 患者の HAND に関する啓発資料開発や、研修会の企画・実施に役立てることができる。

研究4(仲倉) 研究Ⅰでは、HIV 陽性者の福祉のゴールの共有は今まで研究等で言われてきているが、本研究では、MSW の思考の過程や価値の明確化を図っており、学際的、社会的意義は大きい。研究Ⅱでは、あいまいとされてきたカウンセリングの効果評価に関する研究であり、アウトプットを問題に限らず、層的にとらえることが必要であること、また HIV 陽性者とカウンセラーとの関係に関する項目の可能性が検討され、学際的、社会的意義は大きい。研究Ⅲは、計画が実行されず、評価できない。

3) 今後の展望について

研究1(池田) HIV 陽性者、ならびに HIV 診療を行っている感染症内科医が安心して精神科への紹介・受診ができるための MAP 作成および、精神科医・メディカルスタッフ向けの継続した定期的な研修会の実施が求められている。

研究2(白阪) 学会発表に加え、精神科医や心理職を対象とした研修機会などにおいて本研究の成果を広く還元する。

研究3(橋本) 引き続き調査を継続し、一次調査の対象者数を増やすとともに、二次調査(専門医による診察と詳細な認知機能検査)ならびに MRI 検査を実施し、HIV 陽性高齢者の HAND の病態を明らかにする。

研究4(仲倉) 研究Ⅰ～Ⅲは、研究目的の基礎となる研究であり、本研究を踏まえ、数量的研究による検討を行う必要があると考える。

6. 結論

研究1(池田) 精神科医療の専門職(精神科医、臨床心理士/公認心理師、精神保健福祉士/社会福祉士、看護師/保健師など)が HIV 陽性者の診療に不安や抵抗感を持たずに積極的に専門的な支援ができるためのパンフレットを作成した。

研究2(白阪) 量的・質的データの両方を通して、HIV 陽性者の精神科受診・カウンセリング利用の阻害要因および促進方法が明らかとなった。

研究3(橋本) HIV 陽性高齢者では、健常高齢者よりも高率に認知機能低下を合併する可能性がある。引き続き調査を継続し、HIV 陽性高齢者の HAND の病態を明らかにする。

研究4(仲倉) 研究Ⅰ：精神科との連携が必要な事象が発生した際に、ソーシャルワーカーの問題のとらえ方や介入方法など思考過程を明確にすることが一部できた。研究Ⅱ：効果を評価する際は、クライアントの心理状態を層的にとらえること、およびカウンセラーとの関係に HIV 陽性者が言及した際はクライアント自身と自己との関係についても考慮することが重要であろう。

7. 知的所有権の出願・取得状況(予定を含む)(太字)

なし。